

## 『パンセ』と2項対立

永 瀬 春 男

『パンセ』を初めとするパスカルの作品中に、2項対立的思考と表現が頻出すること、それが単にパスカルの方法のみならず、彼の世界観自体に根ざした特性であることは、これまでも指摘されてきたことである。

例えば J. メナールは、講演「パスカルの普遍性」の中で、異質な要素からなる現実の不連続な性格——その最たるものは自然と超自然の断絶である——は、厳密に均質な幾何学的演繹によっては把握不可能であると述べ、対立する（若しくは相補的な）概念の結合によって、こうした現実の全体的把握をめざすところに、パスカルの精神の特徴を認めている。パスカルによれば、真理は部分的なものにすぎず、対立する真理を結び合わさねば本当の真理に達しえない。こうしてパスカルにおける対立2項の結合は、全体性把握への第一歩をなすとメナールは見るのである<sup>1)</sup>。

かかる思考法は、デカルトに代表される近代主流の思想と対照的なものであろう。T. スポエリによれば、後者の世界は、均質な時空間、質を捨象した量という共通尺度、自然法則の因果関係に拠って成立する。一方パスカルは、不連続と質的多様性を持ち、象徴関係によって構造化された世界を対置する<sup>2)</sup>。

こうした世界把握の最も目覚ましい例が、有名な「3つの秩序」(308)に見い出せよう。身体・精神・愛の3領域は相互に共通の尺度では計れぬ質的差異を有する。このため下位の量を増大させても、上位の秩序との間には無限の断絶が存在する。ただ下位秩序は上位秩序の似姿(象徴)として、位階構造の中に場を占める。「3つの秩序」はその名の通り3項関係ではあるが、幾つかの2項対立(身体/精神, 精神+身体/愛, など)を基本とし、それらを総合す

1) J. Mesnard, 《Universalité de Pascal》, in *Méthodes chez Pascal*, P. U. F., 1979, pp. 345-346. 同論文でも言及されている断章 L. 443, 701, 619 及び L. 257 などを参照。なお『パンセ』からの引用は、ラフュマ版の断章番号(記号 L. を付すことあり)で示す。また 1°, 2°, ……で分類綴りの章を示す。

2) T. Spoerri, 《Les pensées de “derrière la tête” de Pascal》, in *Blaise Pascal, l'homme et l'œuvre*, Minuit, 1962 [1<sup>ère</sup> éd.: 1956], p. 386 sq.

るものであることは、メナールも指摘している<sup>3)</sup>。

本稿では紙幅の関係もあり、検討対象を『パンセ』に限定した上で、(I) 2項対立的思考の遍在を確認し、(II)それが護教論の作品構成に演ずる役割の一端を考察してみたい。

## I

1. *deux* の多用 A. ロビネは電算機による語彙調査を基に、『パンセ』における *deux* という語の使用頻度の高さに注目し、同時代の思想的著作若干と比較した上で、パスカルに見られるこうした特徴が「極めて孤立した特殊なもの」だと指摘している<sup>4)</sup>。

『パンセ用語索引』によれば、*deux* の使用は184回、仮に実詞の頻度順位中に置いてみるなら、実に9番目に位置する。これより上位には *Dieu*, *homme(s)*, *nature*, *raison*, *vérité* など、一見して『パンセ』の基本語彙に属す名詞が並んでいるだけであり、*deux* の頻度は *miracles* や *religion* よりも高いのである<sup>5)</sup>。

更に、パスカルの自筆原稿の書法を勘案すれば、アラビア数字の「2」も無視できない (L. 183, 241, 286 など、*deux* の代わりに2と記している例を参照)。その頻度66のうち、単に書物の章や節を示すものを除く30例近くを加算すれば、実詞中の順位は7位に上昇する。C. ムリヨンも言うように、*trois* (及びそれ以上の数) の頻度はずっと低いので、『パンセ』における *deux* の多用は無視できぬ特徴とみなせよう<sup>6)</sup>。

これを「極めて孤立した特殊な」事実だとするロビネの指摘は、他の著作との使用頻度率 (使用回数÷総延べ語数) の比較を根拠にしているが、具体的数値は示していない。ロビネの用いた資料のうち、筆者の手許にあるデカルトの『省察』仏訳版用語索引に限って言えば、問題の語は実詞中で34番目あたりに位置し、頻度率は0.00073である<sup>7)</sup>。一方『パンセ』では0.00179 (概数) となり、比較してかなり高い数値 (約2.45倍) を示している<sup>8)</sup>。

3) Mesnard, *op. cit.*, pp. 348-349; Mesnard, 《Discontinuité, contrariété, répétition : un modèle de l'écriture pascalienne》, in *L'Intelligence du passé...*, Univ. de Tours, 1988, p. 415.

4) A. Robinet, 《Informatique et lexique pascalien : remarques critiques》, in *Méthodes chez Pascal*, p. 195.

5) 6) H. M. Davidson et P. H. Dubé, *A Concordance to Pascal's Pensées*, Cornell Univ. Press, 1975; Cf. C. Meurillon, 《Les combinaisons pascaliennes ou les avatars de la pensée ternaire》, in *Equinoxe*, 6, Rinsen-Books, 1990, p. 50 et p. 66, n. 5.

7) *Cogito 75. René Descartes : Méditations métaphysiques*, Vrin, 《Philosophie et Informatique》, 1976, pp. 116-117.

8) 『パンセ用語索引』には、使用総延べ語数が明記されていない。筆者の試算では119.054とな

2. 2項対立の相互連関 《deux》の多用が、冒頭に述べた2項法的思考と関係を持つであろうことは、想像に難くない。ロビネもこれが人間の2重性を初めとする相克的な2項対立に対応し、パスカルの世界的世界の悲劇的本質を語彙レベルで表出するものだとしている<sup>9)</sup>。

ここで《deux》の実際の用例を、前記の『用語索引』を参考に確認しておこう。

まず人間の2重性に目を向けるなら、腐敗と偉大の2つの本性(241)に始まり、これに由来する怠惰と傲慢の2つの悪徳(208)、それに対応する快樂派とストア派の2流派(410)、或いは無神論と理神論の2派(449)、気晴らしにふける人間を引き裂く2つの本能(136)、意志を分裂させる欲望と愛の2つの原理(502)……と枚挙にいとまがない。

宗教の探求と人間の認識能力に関しては、理性の排除と理性への跪拝という2つの行き過ぎ(183)が批判されるし、信仰へ向けて精神と自動機械(身体)という2つの部分への働きかけが要求される(821)。また「賭」は人を神ありか神なしかの2つの選択肢に直面させる(418)。

キリスト教の基礎や原理についても、「2」という指標は繰り返し現れる。神の存在と本性の墮落という信仰の2つの要諦(449)、字義的と象徴的の2つの聖書解釈(252,260)、予言の2つの意味、それによる旧約と新約2つの聖書の同時証明(274)。更にはイエスの2つの本性(241,449)、自らを隠した顕す神の2面(427)、各宗教の持つ肉的和と霊的の2種の信徒(286)、等々。

以上「2」という数がテキスト中に実際に現れてくる場合のみを拾っても、『パンセ』の主要な概念と主題群が網羅される如き観がある<sup>10)</sup>。またこれら2項関係の殆どが、相克的・対立的関係であることも確認できる。重要なのは、これら2項1組の諸概念の多くが相互的連関で結ばれていることである。それは単にA/B, C/D, E/F……という個別的な対立であるよりも、むしろ $A^1/B^1, A^2/B^2, A^3/B^3, \dots$ ……という図式表示に近い関係である。従ってそこには $A^1 - A^2 - A^3, \dots / B^1 - B^2 - B^3, \dots$ ……という一連の系列化を認めうることになる。かくして人間の本性をめぐっては、

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{悲惨—絶望または怠惰—快樂派—無神論……} \\ \text{偉大—傲慢—ストア派—理神論……} \end{array} \right.$$

、り、これを基に頻度率を算出したが、多少の誤差はあるかもしれない。

9) Robinet, *op. cit.*, p. 195.

10) メナールは「人間の全領域を覆う概念の網の目」と評する。《Universalité...》, p. 347. また次の論文も興味深い: J. Pucelle, *La dialectique du renversement du pour au contre et l'antithétique pascalienne*, in *Méthodes chez Pascal*, p. 445 sq.

という系列化が成立するであろうし、護教論後半の主題群の間には、

{ 欲望—イエスの悲惨—隠れる神—字義的意味—肉的異教徒—肉的ユダヤ人……  
 { 愛—イエスの偉大—顕れる神—霊的意味—霊的異教徒—霊的ユダヤ人……

という対応関係が認められよう。

2項対立は、このように相互に関連し呼応し合いつつ、護教論全体を貫通する基本図式となっているのである。

3. 2項対立への偏愛 パスカルの思考形態が2項対立への強い傾向を持つことはL. 154のような断章によく表れている。冒頭に「分け前。次の様々な仮定に応じて、この世で違う生き方をしなければならない。」と記された後、初稿段階では順に番号を付した5つの仮定が並んでいた。

1. si on pourrait y être toujours.
- [2. s'il est incertain si on y sera toujours ou non.]
- [3. s'il est sûr qu'on n'y sera pas toujours, mais qu'on soit assuré d'y être longtemps.]
- [4. s'il est certain qu'on n'y sera pas toujours, et incertain si on y sera longtemps.]
5. s'il est sûr qu'on n'y sera pas longtemps, et incertain si on y sera une heure.

ところがパスカルは「この最後 [第5] の仮定が我々のものである。」と記した後で、2～4の仮定を抹消し、その上に「誤り」と書き込んだのである。人間の短い一生など、その前後に拡がる永遠の中に飲み込まれてしまう(68)こと、「有限は無限の前で消滅し、無そのものに化す」(418)ことを知る著者にとって、2～4の仮定は無意味に煩瑣な区別にすぎない。また我々の生命とは「この世で最もはかないもの」(152)であり、死は「我々を一瞬ごとに脅かし」続けている(427)。結局永生(仮定1)か不可避の死(仮定5)かという2項を残せば充分となる。パスカルのラディカルな発想法と2項対立の親密さを示す推敲過程といえよう。

仮定1と5の2項対立は、「最後の仮定が我々のもの」とする最終行によって解消されるが、そこから新たな2項対立である「賭」の議論がはじまることになる。そこで神ありか神なしかの選択を迫られた対話相手は、「正しいのは賭けないことだ」と選択自体の回避を試みるが、護教論者は「賭けねばならない。それは任意のことではない。君は船に乗り込んでいるのだ。」と応じて、再び相手を2項対立の場に引き入れる。神があるかないかは、逃れようのない

実存的選択と化すのである。

またパスカルには様々な哲学流派を、認識の問題については懐疑論と独断論の2派で、道德については快樂主義とストア主義の2派で、それぞれ代表させる傾向がある<sup>11)</sup>。例えば L. 131 では懐疑論と独断論の論争に触れて中立の立場はなく、中立を選ぶのは即ち立派な懐疑派に属することだと述べて、「賭」の場合と同様中間的立場の存在を否定する。パスカルは初稿段階では、折衷的立場のアカデメイア派を含め3学派に言及していたが、推敲過程で3派を2派に整理してしまった。L. 154 同様2項法への偏愛を物語る推移といえる。

## II

1. 護教論の構成 2項対立は未完の護教論の構造自体とも深く関わっている。何よりもこの著作は基本的に2部構成の書物として構想されていた。この点は2つの写本が伝える目次によっても明白である。即ち27(または28)の章の表題は、目次の左右両欄に10対17(または18)に不均等に配分されているが、表題間の間隔を調節して、両欄の長さが等しくなるように工夫されているのである<sup>12)</sup>。

この目次に表れた2分割が L. 6 の示す著作の2部構成の計画に対応するものであることは、今日もはや定説といってよいだろう。

1. Partie. Misère de l'homme sans Dieu. [A]

2. Partie. Félicité de l'homme avec Dieu. [B]

---

autrement

1. Part. Que la nature est corrompue, par la nature même. [A']

2. Partie. Qu'il y a un Réparateur, par l'Écriture. [B']

簡潔ながらこの断章は本稿の論点にとって、以下のような豊富な情報を含んでいる。

(i) 著作の2部構成を明瞭に予告している。2つの部分は扱う主題において対照的・対立的である(作品構造の2項対立)。

(ii) この断章の構造自体にもそれが反映している。断章は1本の横線と「換言すれば」の語で2分され、後段は前段の反復となっている。更に両段の内部

---

11) Mesnard, 《Universalité...》, p. 347.

12) このことは目次の写真版で容易に確認できる。例えば, *Les Pensées de Pascal ont trois cents ans*, G. de Bussac, 1971, entre p. 12 et p. 13.

も同一構文の反復から成り、テキスト全体で A / B // A' / B' という 4 分割 (2 分割の反復) 構造を示す (断章構造の 2 項対立)。

(iii) 表現内容の面でも 2 項対立は歴然としている。misère / félicité, sans Dieu / avec Dieu, la nature (est) corrompue / un Réparateur, nature / Ecriture という対立概念が、同一構文中の同位置を占めることで際立った効果を生んでいる (表現内容の 2 項対立)。

(iv) misère と félicité の語がともに homme に結合されることで、この対立項が同一主体の相反する特性であることが示されている。続く本性の腐敗 (A') とイエスによる贖罪 (B') は、キリスト教信仰の 2 大要諦 (427, 449) に他ならなかった。つまり護教論の基本主題は、実にこの断章の 4 項 (A, B, A', B') に集約されているといっても過言ではない。

(v) テキスト第 1 行から登場する Dieu と homme の語は、『パンセ』に使用される全実語 (mots pleins) 中で頻度順 1 位と 2 位の語である。護教論とはこうして神と人間という 2 項をめぐる、その対立 (sans) と和解 (avec) についての書であることが、作品冒頭から示されている<sup>13)</sup>。

このように L. 6 は、自らの 2 項対立的構造と内容によって、作品全体の同じ特性を象徴的に開示する断章となっている。

2. 「相反」の主題 『パンセ』に含まれる様々な 2 項対立の中で、最も基本的なものは、著者自身が「相反 (contrariétés)」と呼ぶ人間の悲惨と偉大の対立である。本節ではこれに的を絞り、それが護教論を縦断していく姿を跡づけてみたい。

護教論第 1 部前半の論理展開は、(1) 人間の悲惨 (2°, 3°, 4°), (2) 人間の偉大 (5°, 6°), (3) 両者の相反とそこからの脱出の展望 (7°), という段階を踏んで進む。

まず真理・正義・幸福の不可能という 3 つの柱を中心に人間の悲惨が描写され (2°, 3°, 4°), 次に第 2 段階への橋渡しとして重要な第 5 章「現象の理由」が置かれる。ここでパスカルは法律や政治制度を俎上に載せ、正義の不在を厳しく批判した後に、「正と反の転倒」という独特の方法により、この社会的現実を最終的に肯定するに至る<sup>14)</sup>。

第 6 章の「偉大」とは「考える葦」(113) の偉大、即ち悲惨の自己認識とし

13) L. 378 参照: 「神と我々の間には越えることのできない対立があり、仲保者がなければ、そこには何の交わりもありえない[……]。」(傍点引用者)

14) 第 5 章「現象の理由」は 2 項対立との関係でも極めて重要であるが、独立した論考の対象とすべきであると考え、本稿では扱わないでおく。

ての思考の偉大であるから、悲惨がそれによって解消されるのではなく、むしろ深刻な2項対立がここに現出する。この章から L. 114 を例に引いてみよう(対立関係を明示化するために、くゝで相反2項を括り、/で2項を分け、対立を標示する機能的語句に下線を付す)。

〈La grandeur de l'homme est grande en ce qu'il se connaît misérable ; / un arbre ne se connaît pas misérable.〉

〈C'est donc être misérable que de se connaître misérable, / mais c'est être grand que de connaître qu'on est misérable.〉

ただ2つの動詞(être と (se)connaître)、2つの具象名詞(homme と arbre)、2つの形容詞(grand と misérable)といった単純な要素を交差させつつ、偉大とは悲惨の認識に他ならないという両者の関係が明快に述べられている。頻出する grand / misérable の対照、同一構文内同位置での同一語或いは反対語の使用などが、人間の2重性を浮き彫りにする。第1段落では2文の並置が、第2段落では接続詞 mais が対立する2項を分割し、かつ接続している。内容と表現の見事な呼応といえる。

第7章「相反」は、「人間の卑賤と偉大を示した後で。今こそ人間は自己の真価を知るべきである。」(119)と語り出され、相反の両面を凝視する必要性と、その片面しか見ぬ危険性を説きつづる。主題の必然として、2項対立は幾度となく登場する。L. 119 は次のように続き、同一構文《Qu'il~》の反復、mais を挟んでの肯定と否定の対照などが、2項対立の緊張を高めている。

〈Qu'il [l'homme] s'aime, car il y a en lui une nature capable de bien ; / mais qu'il n'aime pas pour cela les bassesses qui y sont.〉 〈Qu'il se méprise, parce que cette capacité est vide ; / mais qu'il ne méprise pas pour cela cette capacité naturelle.〉 〈Qu'il se haïsse, / qu'il s'aime〉 : 〈il a en lui la capacité de connaître la vérité et d'être heureux ; / mais il n'a point de vérité, ou constante, ou satisfaisante.〉

L. 121 はやや複雑な構成を持ち、悲惨のみを見る場合、偉大のみを見る場合、どちらも見ない場合、見る場合の4つが提示される。ほぼ同じ構成の2つの段落から成るが、より簡潔な第2段落だけを引用する。

〈Il ne faut pas que l'homme croie qu'il est égal 〈aux bêtes / ni aux anges〉, / ni qu'il ignore 〈l'un / et l'autre〉, // mais qu'il sache 〈l'un / et l'autre.〉〉

接続詞 *et, mais, ni* の他, *l'un et l'autre* なども 2 項対立の指標となることの多い表現である。

また 5 行詩を思わせる L. 130 の初めの 2 行では, 分かち書きが 2 つの文の構造的同一性と内容上の交錯を鮮やかに印象づけている。

〈*S'il se vante je l'abaisse. /*  
*S'il s'abaisse je le vante.*〉

こうして著者パスカルは, 相手が自己の不可解な怪物性を理解するまで, いつまでも言い逆らってやろうというのである。

第 7 章中で最長の L. 131 は, 第 2 章以来の悲惨—偉大—相反という議論展開を総括する断章である。ここで著者は, 人間的立場ではいかようにも解き難い相反の「もつれ」を雄弁に示した後, この相反の原因として原罪とその遺伝というキリスト教の奥義を初めて正面から提示する。水平的 2 項対立は, アダムの失寵 (原初の偉大からの転落) という垂直的次元対立に起因するという構造がここに明確化されることになる。

本節 (II-2) 冒頭でも示唆したように, 護教論第 1 部においては, 章と章の連関自体も 2 項対立の基本構図にのっとり展開していく。第 2 ~ 7 章がこうしてひとつのまとまりをなす (悲惨 = 2°, 3°, 4° / 偉大 = 5°, 6° / 相反 = 7°) が, 続く 3 つの章も幸福の追求と挫折を主題として同様の論理展開に立つ。即ち第 8 章は悲惨のみを知る者がそこから目を逸らそうとして陥る「気晴らし」の批判であり, 第 9 章は偉大のみを見て自力で神にまで到達できると考える「哲学者 (ストア派)」の道徳の批判である。こうした 2 方向の幸福追求の挫折を受けて, 第 10 章は「ただ神のみが, 人間にとって真の幸福である」(148) ことを告知する。2 項対立はここでも, 垂直的な次元対立という新しい展望を指し示して終るのである。このように第 8 ~ 10 章の展開には, 悲惨—偉大—相反という第 2 ~ 7 章の展開との明白な類比性が認められる<sup>15)</sup>。

相反が第 1 部の基本主題であるならば, その解決・治療が第 2 部を貫く課題となる。第 2 部の序にあたる第 11 章「A. P. R.」は, 真の宗教の条件の提示から始まるが, その第 1 要件は, 相反の現実を教え, かつその理由を説明しうることだとされる。

15) こうした論理展開について次の拙論で触れたことがある: 「パスカルの『3つの秩序』」, *GALLIA*, 第 14 号, 大阪大学, 1975; Cf. Mesnard, 《Le thème des trois ordres dans l'organisation des *Pensées*》, in *Pascal. Thématique des Pensées*, Vrin, 1988, pp. 51-53.



〈Les grandeurs / et les misères〉 de l'homme sont tellement visibles qu'il faut nécessairement que la véritable religion nous enseigne et qu'il y a quelque grand principe de grandeur en l'homme / et qu'il y a un grand principe de misère〉.

Il faut encore qu'elle nous rende raison de ces étonnantes contrariétés.  
(149)

少し先に〈Adam, / J. -C.〉という1行が見い出せるが、キリスト教はアダムの原罪によって相反の理由を説明し、イエスの贖罪によって相反への治療薬を与えるとされる。

この仲保者イエスによって神を知る者は、自己の悲惨をも知る(190)ことで、傲慢と絶望の2つの悪徳を免れうる。第14章は、この点にキリスト教の神の証明の「卓越性」を認めようとする。L. 192 を読んでみよう。

〈La connaissance de Dieu sans celle de sa misère fait l'orgueil. /  
La connaissance de sa misère sans celle de Dieu fait le désespoir.〉  
La connaissance de J. -C. fait le milieu parce que nous y trouvons, et  
Dieu / et notre misère〉.

相反の癒し手としてのイエスの登場が、ここで第3項を構成している(第3段落)。勿論これは相反2項と無関係の第3項ではなく、両項の「中間」、即ち相反2項の同時認識という一種の総合化の形をとるものである。

これと反対に、「他宗教の虚偽」(第16章)は、真理全体を見ず、相反の1項だけを認識することにより、2つの悪徳のいずれかを生み出すところにあると言われる。

Sans ces divines connaissances qu'ont pu faire les hommes sinon ou s'élever dans le sentiment intérieur qui leur reste de leur grandeur passée, / ou s'abattre dans la vue de leur faiblesse présente〉. Car ne voyant pas la vérité entière ils n'ont pu arriver à une parfaite vertu, 〈les uns considérant la nature comme incorrompue, / les autres comme irréparable〉, ils n'ont pu fuir ou l'orgueil / ou la paresse〉 qui sont les deux sources de tous les vices, puisqu'il ne peut sinon ou s'y abandonner par lâcheté, / ou en sortir par l'orgueil〉. [...]

La seule religion chrétienne a pu guérir ces deux vices, 〈non pas en chassant 〈l'un par l'autre〉 par la sagesse de la terre, / mais en chassant

〈l'un et l'autre〉 par la simplicité de l'Évangile〉. (208)

傲慢と絶望の2項に対し、引用文中最後に出てくる「福音の単純さ」がキリスト教の提示する第3項（解決の道）である。ou～ou～という指標の反復使用に注意しておきたい。

この後、相反が再び本格的に問題とされるのは、キリスト教の真理性の証明を一巡し終えた後に、真の幸福と徳のあり方を語る第26章「キリスト教道徳」においてである。この宗教は、神の存在と人間の悲惨を共に教えることで、人間を傲慢にも卑屈にもさせないという前述の特性が、改めて強調される（351～353など）。L. 351を引いてみる。

Le christianisme est étrange ; il ordonne à l'homme de reconnaître qu'il est vil et même abominable, / et lui ordonne de vouloir être semblable à Dieu.〉 Sans un tel contrepoids cette élévation le rendrait horriblement vain, / ou cet abaissement le rendrait horriblement abject〉.

人間は現世において直ちに救済の保証を得られるわけではなく、常に恩寵を受けるか失うかの2重の可能性の中にある（354）。しかしながら L. 358 は、2つの悪徳を免れたキリスト者の在り方を、均衡のとれた文章で次のように描きだす。第1部における相反の緊張感と比べ、一種静穏さの漂う断章といえる。

〈Avec combien peu d'orgueil un chrétien se croit-il uni à Dieu. / Avec combien peu d'abjection s'égalé-t-il aux vers de la terre.〉 La belle manière de recevoir la vie / et la mort〉, les biens / et les maux〉.

以上本節で検討した過程を、ここで要約しておこう。まず相反2項が悲惨、偉大の順でとりあげられた。後者は前者自体から引き出されるが故に、2項対立の解消ではなく激化をもたらす（6°）。こうして人間が直面するのは、自己の不可解な怪物性という、人間的哲学では解決不可能な相反・矛盾である。人間はこの両面を共に凝視して目を逸らせてはならない（7°）。真の宗教の条件は、この相反の起源を示してこれを説明できること、またそこからの脱出の道を教えうることにある（11°）。キリスト教だけが、イエスによる神の認識を通して、人間を絶望と傲慢の2つの病から癒せる（14°）が、他の宗教や哲学は、そのいずれかを生み出すにすぎない（16°）。最後にキリスト教道徳に拠って生きる者には、相反の両面を知りながら、2つの悪徳からも癒される安定した生き方がある（26°）。

\* \* \*

2項対立はパスカルの思考の基本図式として、『パンセ』中に遍在する。それは例えば「2」という数となってテキスト上に出現しやすいが、その他にも字句や文章構造、段落構成などにおいて一定の形態を取ることが多い。パスカルの意識的なテキスト構成は、僅かの引用例からも確認できたであろう。

2項対立は護教論の幾つかの章の主題を担うのみならず、章相互間の連関と論理展開をも支える重大な役割も演じている。本稿では「相反」をモデルケースにとってそれを検証したが、相反以外にも2項対立に依拠する重要主題は多い（象徴、予言など）。表現形態面のより詳細な分析と併せ、それらの総合的な検討は別の機会に譲りたい。

(D, 1977 福井大学助教授)